

研究報告

ガリポリ 1915 年

グラハム・ダンロップ

「5 万人の優れた陸軍と海軍力——それでトルコの脅威は終わるでしょう。」

ウィンストン・チャーチルの外務大臣エドワード・グレイ卿宛て 1914 年 9 月 6 日付書簡

1915 年 4 月 25 日の静かな朝、ガリポリ半島を包む闇を夜明けの冷たい灰色の光が照らし始める頃、ロイヤル・フュージリアーズ連隊の先頭突撃部隊はヘレス岬の前浜に接近した。岩がちな狭い海岸の背後に急な断崖がそびえている。辺りは静まり返り、聞こえるのはこの部隊を戦場に運んできた甲板のない木製ボートのオールがかすかにきしんで水を切る音だけだった。今にも岸に達しようとしたそのとき、静寂を破りトルコ軍の防衛部隊が断崖の上から眼下の船団に向けて銃撃を開始した。遮蔽手段もなく上方から襲われた突撃部隊は極めて危険な状況に陥ったが、その直後、後方の暗闇の中から敵軍に向けて一斉に砲が放たれた。イギリス海軍戦艦「インプラカブル」の舷側射撃である。上陸用舟艇のすぐ後方についていた「インプラカブル」は、わずか 400 メートル沖合で竜骨を海底に乗り上げており、上甲板にいた者の中に敵の銃撃による負傷者が出た。戦艦の 12 インチ、6 インチおよび 12 ポンド砲が敵陣を一掃し、ロイヤル・フュージリアーズ連隊は 1 人の死傷者も出さずに上陸した。この部隊が上陸に成功したことで、岬の先端を回ったところで難渋していた別の大隊にとっても形勢が一変した¹。両方の上陸地点から部隊が合流し、陣地を固めている間に、特に命令なく「インプラカブル」の砲身が敵の反撃を封じるためさらに内陸の標的に向けられた。この日の状況を考えれば、これは部隊レベルでの極めて優れた水陸両用作戦であった。だが残念なことに、優れた模範といえるものは、この日はこの一件しかなかったのである。

従軍した者たちの勇敢さと忍耐にもかかわらず、1915 年 2 月から 1916 年 1 月まで続いたガリポリ半島とダーダネルス海峡での軍事行動は、それまで大英帝国軍が実施した中でも極めてお粗末な連合作戦に数えられる。本稿のねらいは、純粋な海戦や陸戦ではない、統連海上陸作戦の諸相に焦点を絞って、これを説明することにある。始めに背景説明とし

¹ Corbett J. S. *History of the Great War, Naval Operations Volume II* (London, Longmans, 1921) (以下 *Naval Operations*) p. 326.

て戦役の経緯をごく簡潔に述べたうえで、主として戦略レベルと作戦レベルでの計画および作戦遂行上の特に重要な失敗を指摘することとしたい。そして最後に、皮肉なことに完璧な成功を収めた撤退作戦についても簡単な考察を加える。

ダーダネルス海峡を強行突破し、コンスタンティノープルを占領するという計画が立案されたのは 1914 年が終わろうとする頃だったが、同様の構想は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてイギリスとトルコの関係が緊張したときにも浮上していた²。第一次世界大戦初期にその緊張が再燃した。オスマン帝国はまだロシア、フランス、イギリスの協商国側に宣戦布告さえもしていなかったが、ドイツとオーストリアの中央同盟国との同盟に傾いているのは明白であった。計画の目的は、トルコを中央同盟国から力づくで引き離すことであった。それができれば、冬季でも利用できるロシアとの連絡路を確保できるほか、スエズ運河と中東油田への脅威を無力化し、ブルガリアが中央同盟国に加わるのを抑止し、1914 年末に塹壕が築かれ膠着状態に陥っていた西部戦線の側面を迂回することができると考えたのである。当初は陸海両軍が参加する統合作戦として構想されたが、やがて海軍のみによる作戦に変わった。しかし構想が発展し状況が変化する中で、再び陸上部隊の必要性が明らかになり、統合作戦計画が復活した。やがてフランス軍も加わり、遠征は統連合作戦となった。

1915 年 2 月 19 日、海軍による本格的な攻撃が始まったが、すぐさま要塞から嚴重に監視された機雷原と機動砲兵隊、そしてダーダネルス海峡兩岸に設置された沿岸発射型魚雷の反撃に遭った。3 月 18 日、海軍力だけでこの防衛網を突破しようとする最後の試みが失敗し、戦艦 6 隻を失うという壊滅的打撃を被った後³、こうなれば強力な陸上部隊でガリポリ半島を掌握するしかないと判断された。陸上部隊がトルコ軍の要塞群を沈黙させて半島を制圧すれば、海軍はダーダネルス海峡を通過できるはずだった。その時点で英仏両国、オーストラリア、ニュージーランドの各軍からなる上陸部隊がすでに招集されており、4 月 25 日に進攻作戦が実施された。

イギリス軍第 29 師団は、半島の南西先端のヘレス岬に上陸した。初日に 5 マイルほど進軍して高台の要衝を掌握するよう命令を受けていたが、実際には小規模な橋頭堡を何とか 2 カ所確保するにとどまり、上陸後数日たってから、強まる一方の敵の反撃に遭いながら恐る恐るじわじわと前進し始めた。

オーストラリア・ニュージーランド軍団 (Australian and New Zealand Army Corps: ANZAC) は、イギリス軍の北東約 15 マイル (約 24 キロメートル) ほどの要塞化されたガ

² Coates T. (Ed), *The World War I Collection, Gallipoli and the Early Battles, The Dardanelles Commission* (London, The Stationery Office, 2001) (以下 Dardanelles Commission) p. 32.

³ Naval Operations pp. 218-223.

バテペ岬付近に上陸した。当初の計画では、そこから半島を横切る谷沿いに急いで前進してダーダネルス海峡西岸に達し、イギリス軍を迎え撃つトルコ軍の側面に回って援軍の半島進入を阻止するはずであった。しかし実際には、暗闇の中で上陸する場所を間違え、気がつけば切り立った崖のふもといた。小規模な橋頭堡は何とか確保したものの、トルコ軍の凄まじい反撃に遭って動きが取れなくなり、作戦行動の大半を不安定な足場の防衛に費やすことになったのである。

フランスの東部遠征軍団 (Corps expéditionnaire d'Orient: CEO) 第 1 師団は海峡のアジア側から陽動作戦を仕掛け、丸一日そこにとどまってからヘレス岬を横断し、イギリス軍の右手に位置をとった。

イギリス海軍師団はサロス湾海上で陽動作戦を行った後、旅団単位に分かれてヘレス岬と ANZAC 入江の橋頭堡の増援に向かった。師団を編成して初めて戦闘に参加したのは 5 月になってからで、ヘレス岬の前線でのことである。

やがて敵味方ともに増援を行い、戦局は塹壕戦による膠着状態に陥った。ヘレス岬前線にイギリス第 8 軍団とフランス CEO の 2 個軍団を編成した連合軍は、正面攻撃を繰り返すもののほとんど進捗がないうえ、多数の犠牲者を出した。いずれにせよ、初日に設定した目標にすら達成に近づくことはなかった。1915 年 8 月 7 日、新参のイギリス第 9 軍団が ANZAC 入江の橋頭堡の北東約 5 マイル (約 8 キロメートル) のスブラ湾に上陸し、再びトルコ側防衛の側面迂回を試みた。同時に、2 個師団が増援されていた ANZAC は橋頭堡からの突破を試みたが、部分的な成功にとどまった。新たな上陸部隊も迅速に前進できず、ほどなくすべての前線が膠着状態に戻った。そして 1915 年 12 月初旬、撤退の決定が下された。ANZAC 入江とスブラ湾の橋頭堡は同月下旬に、ヘレス岬は翌 1916 年 1 月 9 日に放棄された。結局、何一つ目標が達成されず、作戦期間中に派遣された連合軍 50 万人のうち半数以上が死傷した。トルコ側もほぼ同規模の損害を被った。

戦略レベルでどこが間違っていたのかを理解するには、イギリス政府が採用していた戦争遂行努力を管理する高次元の組織について理解する必要がある。当時のイギリスには国防省も統合同司令部もなく、陸軍は陸軍省、海軍は海軍本部が統轄していた。この二つの官庁は全体としてはとても良好に協力していたが、それぞれは全く別の官庁で、いずれもかなり型破りな大臣がトップに就いていた。当時の陸軍大臣は異例なことに政治家ではなく、軍人出身のホレイショ・ハーバート・キッチナー陸軍元帥である。キッチナーはその軍務経験と名声を活用して権限を自らに集中させ、陸軍の武官最高位職である帝国参謀総長のウルフ・マレー中将与その幕僚ですら事実上、脇に置かれて影が薄くなっていた。ウルフ・マレーはいかなる状況下でもキッチナーに逆らおうとはしなかった。しかし、キッチナーはその自信とは裏腹に、引き受けたその責任に十分に対処できないことが判明した。さらに陸

軍省の精鋭の参謀将校らは開戦時にイギリス遠征軍に加わってフランスに送られていたため、陸軍省から政府への信頼できる軍事面での助言が欠けることになった⁴。

海軍大臣だったウィンストン・チャーチルは、その政治と演説の才に疑いはない一方で、非現実的な計画を推し進め、不都合な細部の事実を軽率にも無視する傾向があった。ガリポリ作戦の中心的な原動力だったのは、このチャーチルである。海軍の武官最高位職である第一海軍卿の座にあったジョン・アーバスノット・フィッシャー海軍元帥は、洞察力、行動力および職能に優れた伝説的軍人として知られ、チャーチルに反論することも厭わなかったが、人前で逆らうのにはためらいがあった。このため、欠陥のある決定でも、覆すのには政府の軍議で公然と海軍大臣に異議を唱えるしかない場合、黙従したのである。海軍本部内で海軍の戦争遂行努力を指導する戦争参謀部は、チャーチル、フィッシャー、海軍参謀長、海軍書記官長のみからなる少人数の窮屈な組織だった。兵站、人事、技術面などを担当する他の海軍卿らは除外されていたため、当然ながら作戦上の助言や立案が健全になされない原因となった⁵。

この戦争を指導していた政府の機関は、ハーバート・アスキス首相が議長を務める閣内の軍事委員会である。委員会の主要メンバーは大蔵大臣、外務大臣、インド担当国務大臣、海軍大臣、陸軍大臣と、政界の「貴顕」といわれたアーサー・バルフォア元首相である。賢明であるはずのバルフォアには、無為無策で無頓着な面もあった。あるときは、「極めて重要な問題は全くないし、いくらかでも重要なことはほとんどない」と公言したと伝えられている。軍事委員会は戦略レベルで陸海軍が共通の目的を持って公式に同席する唯一の場であったが、出席する軍部の責任者は政治側の責任者のアドバイザーとしての立場でしかなく、特に意見を求められない限り議論に口を挟むことは許されなかった⁶。委員会の会合は不定期で、正式な議事録の作成や決定事項の公布もされなかった⁷。内閣を完全に排除して事を進め、意思決定を行うこともしばしばで、閣僚の大半は戦争遂行責任とのかかわりを避けることで満足しているようであった。おそらく最も明晰な思考ができていた人物は、委員会の書記官長だったモーリス・ハンキー中佐である。ハンキーは独自に記録を残し、委員たちが集中力を保ち、委員会の検討事項を忘れずにいられるように最善を尽くしたが、いつもうまくいくとは限らなかった。結局のところ、軍事委員会は軍種間を超えた統合と多国籍にまたがる連合作戦の遂行には適切でなかったのである。壊滅的な結果に終わったガリポリ作戦の調査を目的として 1917 年に開催されたダーダネルズ委員会では、1914 年末の

⁴ Dardanelles Commission p. 30.

⁵ Dardanelles Commission pp. 26-27.

⁶ Dardanelles Commission pp. 14-31.

⁷ Dardanelles Commission pp. 17-18.

時点での軍事委員会の活動について次のような意見が出されている。

このように、この上なく重要な事態が生じていた4カ月の間、高次の軍事作戦の立案と統制のために採用された仕組みは、稚拙かつ非能率的であった⁸。

このような状況にあったちょうどその時期に、政府レベルでガリポリ作戦が立案された。そのことが、この作戦にかかわるその後のほぼすべての事柄に悪影響を及ぼすことになる。

ガリポリ作戦に関しては、前線部隊指揮官と同様に、軍事委員会の活動も疑念と過信という相矛盾する意識の影響を受けていた。この作戦で西部戦線の行き詰まりを打開し、ブルガリアの中央同盟国入りを阻止できたのかという点に関しては、第一次世界大戦の公刊戦史に「……この作戦には開始当初から、成功を確信できないという障害があった」と記録されている⁹。それでも軍事委員会では、艦隊がダーダネルス海峡を強行突破してコンスタンティノープルに達し、オスマン帝国政府を崩壊に追い込むことは可能だと概ね信じられていた¹⁰。皮肉なことに海軍が最後に海峡突破を試みて失敗した1915年3月18日直後の数日のうちであれば、実際にそうになっていたのかもしれない。その時点で海峡の防衛部隊は弾薬がほぼ底をつき、士気も下がっており、激しい戦闘の後でトルコ政府は厳戒態勢にあった。連合国の艦隊が素早く攻撃を再開していれば突破できたとも考えられる。しかし、連合国側も弾薬が不足していたため、撤退して傷を癒すほうを選んだのである。この間、連合国側が戦闘を打ち切ったことに気づいたトルコは、ドイツ人の軍事顧問の後ろ盾を得てほどなく士気を回復し、やがて来るであろう連合国の進攻作戦（この予測が当たった）に備えて防御の立て直しと強化を始めた¹¹。連合国艦隊はたとえ海峡を突破できていたとしても、問題がなくなりとはしなかつただろう。オスマン帝国政府が直ちに崩壊しない限り、ガリポリ半島をしっかりと掌握しなければ、マルマラ海で艦隊を維持することはほぼ確実に不可能であった。ダーダネルス委員会の報告には以下のように記されている。

担当の当局者は誰ひとり、ダーダネルス海峡を突破後にとるべき行動にさほど注意を払っていなかったようである……。突破後もマルマラ海上の艦隊との連絡がこれらの砲兵隊によってある程度は妨害されるであろうことは認識されていた。しかし

⁸ Dardanelles Commission p. 17.

⁹ Aspinall-Oglander C. F. *History of the Great War, Military Operations, Gallipoli*; (London, Her Majesty's Stationery Office, 1929) (以下 Official History) p. 63

¹⁰ Official History p. 69.

¹¹ Official History pp. 104-105.

コールウェル将軍(作戦部長)の証言によれば、ロンドンではトルコ側の抵抗の程度が当初から大幅に低く見積もられており、この主張は特に重要視されていなかったようである¹²。

いずれにせよ、艦隊がダーダネルス海峡を強行突破できるという確信は、根拠の薄いものだった。艦砲射撃の効果への過信は、開戦直後の時期に、ドイツ軍の激しい砲兵射撃に直面してベルギー軍のリエージュとナミュールの要塞が短期間で陥落したことに端を発していた。ダーダネルス海峡でも同じことが繰り返されうるという確信は、オスマン帝国が連合国に宣戦布告した直後の1914年11月3日に、ガリポリ半島先端のセッデュルバヒルにあるトルコ軍要塞を爆破したことでさらに強まった¹³。ところがこの要塞の爆破は、実は古い石壁の旧式の要塞に運よく砲弾が当たっただけの例外的な出来事であった。より近代的なベルギーの要塞は、コンクリートの防護壁と土塁の上を越えて撃ち込まれた曲射砲の高角射撃に屈した。同様の防護力をもつダーダネルス海峡沿いの新式の要塞に対しては、平射弾道で高速の砲弾を撃つ艦砲では限られた効果しかなかったのである。ダーダネルス委員会は次のような見解を示した。

ベルギー軍の要塞が容易に破壊されたことが過度に重要視され、これらの要塞とダーダネルス海峡沿岸の要塞との類似性が過大評価されていたと考えざるを得ない¹⁴。

さらに、トルコ軍兵士は戦闘能力に欠け、連合国の海軍力と陸軍力を前にすれば崩壊するはずだという一般通念がこの過信に拍車をかけていた。このような誤認の原因は、1912年のバルカン戦争やメソポタミアやシナイでのいくつかの作戦行動でトルコ軍は低質だったとみなされていたことや、1914年12月18日にイギリス軍小隊がアレクサンドレッタ付近に上陸したとき、トルコ軍兵士がイギリス海兵による鉄道爆破に事実上手を貸すことになったという、まるで喜劇のような事件が起こったことにある¹⁵。ダーダネルス委員会は次のように報告している。

¹² Dardanelles Commission p. 60.

¹³ Dardanelles Commission p. 115. Rhodes-James R. *Gallipoli* (London, Batsford, 1965) (以下 Rhodes James, *Gallipoli*) p. 14.

¹⁴ Dardanelles Commission pp. 50-53.

¹⁵ Dardanelles Commission p 115; Rhodes-James *Gallipoli* p. 16.

バルカン戦争やメソポタミアでの最近の戦闘における出来事の結果として、トルコ軍兵士は戦闘員としての能力が劣るとの見方が広まっていたが、上陸時とその後数カ月にわたるヘレスとアンザックでの戦闘の間に、これが誤った見解であることが明らかになった¹⁶。

また、連合軍の潜水艦がマルマラ海を封鎖すれば、トルコ軍のガリポリ前線への増援・補給経路を遮断できるという考え方も広まっていた¹⁷。事実、潜水艦隊はトルコ軍がマルマラ海を横断するのを妨害し、コンスタンティノープル港内でトルコ船1隻を魚雷で撃破したが、結局この経路を完全に遮断することはできなかった。一方のトルコ軍は陸路での長く困難な行軍を強いられながらも、何とか封鎖を迂回できたのである。

3月18日に海軍が敗退した後、少なくとも作戦戦域にいた上級将校は現実を認識し始めた。連合軍の陸上部隊を指揮したハミルトン将軍は、こうなれば大挙して上陸するしかないことを理解し、敵軍の質と兵力も思い知らされていた。そこで3月18日、キッチナー宛てに密かに次のように書き送った。「現時点でここガリポリの攻略は、閣下の執務室の地図上に見えるよりもはるかに難題であるように思われます。」¹⁸ とはいえ、ハミルトンがそれまで通り疑念を部下に悟られないよう注意していたこともあり、部隊には過信の悪影響が広がり、兵士たちは突撃のときを待ちきれずにいた。「当初から遠征隊に加わっていた者たちは、異常なまでの高揚感と冒険心、ほとんど想像もつかない可能性への身震いするほどの期待感によって団結していた……。このような非現実的な冒険心が、最高指揮官も含めて全軍に広がっていた」とある者は書いている。ニュージーランド軍のある兵士は「我々は早く進軍したくてうずうずしていた。運河でのトルコ軍の失態から、彼らの戦い方を馬鹿にしていたのだから」と記し、オーストラリア軍兵士はさらに踏み込んで、「誰が我々を阻止できただろうか。あのトルコ野郎たちにできたはずがない」と断言している¹⁹。だが、その大きな期待は4月25日、血に染まる海岸を朝日が照らし出したときに打ち碎かれることになる。

仮に連合軍側の誰かが冷静になって、ドイツの軍事顧問の支援を得たオスマン帝国政府とトルコ軍兵士が祖国への不遜な侵略にどんな反応を見せるかを考えていれば、連合軍は十分慎重を期して、指揮系統のあらゆるレベルで状況が正しく理解されるように努めていたかもしれない。だが実際は、この壮大な統連合作戦には、中途半端な戦意、欠陥のある考え方、ずさんな手順、拙劣な指揮といった問題が終始つきまとったのである。

¹⁶ Dardanelles Commission p. 140.

¹⁷ Dardanelles Commission p. 115.

¹⁸ Dardanelles Commission p. 121.

¹⁹ Rhodes-James Gallipoli p. 86.

統連合作戦を成功させるために極めて重要な要素として、戦略および作戦上の目的を統一し、創案と計画立案を最初から共同で行うことが必要である。また、達成可能な最終状態をよく理解した上で、それを明確に定められた任務の形にして、実行に当たる者たちに伝えなければならない。また各人の責務が明確に決められた堅固な指揮系統と、経験豊富な指揮官と幕僚、十分に訓練され、専門任務にふさわしい装備を施された部隊も必要である。さらに、優れた情報とその厳格な保全も求められる。ガリポリの戦いのように水陸両用作戦が長期に及んだ場合、攻撃側は防御側よりも早く陸上部隊を増強して維持し、戦場への敵側の増援と補給を遮断しなければならない。また、それぞれに安全が確保され、適切に装備された基地からなる強固な兵站構造が必要である。これらをすべて適切な連絡手段で結ばなければならない。出口戦略も必要になる。しかし、ガリポリ作戦の計画にはこれらの必要不可欠な要素がどれ一つ存在しなかった。

イギリス政府内には当初から、遠征の全体構想とそれに必要な部隊をめぐって深刻な分裂があった。チャーチルが率いる一派はこの作戦を、膠着した西部戦線から戦争遂行努力を拡大させるための不可欠な作戦とみなしていた。一方、西部戦線を戦争遂行努力の集中すべき本質的な要諦とみなし、提案されたガリポリ作戦はそこから不必要に注意をそらせ、戦力を分散させるものだと考える者たちもいた。その結果、指揮の最高レベルで方針の揺れと目的の不統一が生じ、それが軍事委員会の欠陥のある運営によってさらに悪化した。チャーチルはまず、1914年11月23日の軍事委員会で海軍によるマルマラ海進攻の構想を提案した。それはオスマン帝国が中央同盟国の側につき、連合国に宣戦布告した3週間後であった。このときチャーチルは、ギリシャ陸軍を上陸させてガリポリ半島を確保させれば、イギリス海軍はそのままコンスタンティノープルに向かい、オスマン帝国政府を崩壊に追い込めると主張した。だが、この提案は却下された。何しろ、中立国であるギリシャの積極的参加に依存することになるからであった²⁰。

その後、事態はしばし放置されたが、やがて1915年1月2日にロシアから、コーカサス地方のロシア軍に対するトルコ軍の圧力をそらすための連合国による「陽動作戦」を求める要請があった。そこで、先のチャーチルの提案が他のいくつかの案とともに再検討された。その結果、このダーダネルス海峡の突破案が唯一実行可能とみなされ、他はすべて却下された。ただし、あくまで「陽動作戦」として行うという決定であり、予期しない抵抗があった場合は中止もありうるとの含意があった。陽動作戦に向けた準備は、トルコ軍の注意を引き、圧力をそらすことが目的ならば、かなりあからさまに行う必要がある。一方、進攻作戦の準備であれば、奇襲を成功させるために秘密裏に進めなければならない。ガリポリ

²⁰ Dardanelles Commission pp. 34-35.

作戦の立案は、この両立し得ない二兎を追うものであった。いずれにしても、このときキッチナーは、本格的な上陸と半島制圧には 15 万人規模の陸軍部隊が必要と助言しながらも、西部戦線での圧力を理由にイギリス軍部隊の派遣を一切拒んだ。そこでチャーチルは、陸軍なしで海軍を送り込むことに決めた。翌 1 月 3 日、チャーチルは軍事委員会に知らせないまま、イギリス海軍の東地中海戦隊を指揮するカーデン中将と連絡を取り、強力な戦艦部隊でダーダネルス海峡を突破し、陸軍の支援なしでコンスタンティノープルに達することは可能かどうかについて意見を求めた。一週間後にカーデンから、組織的かつ段階的な行動により、沿岸の要塞群を沈黙させてから機雷を少しずつ掃海していけば可能だと考えられるとの返答があった。1 月 13 日、チャーチルが軍事委員会でカーデンの構想を提案すると、原則として承認された。フィッシャー第一海軍卿は意見を異にしたが、公然とチャーチルに逆らうのははばかり、口を挟もうとはしなかった。委員会は海軍本部に対し「コンスタンティノープルを目標とし、ガリポリ半島を砲撃して奪取するための海軍遠征を準備」するよう指示した²¹。委員会がここまで任務命令に近い指示を出したのはこのとき限りだが、その内容は曖昧で非現実的だった。アスキス首相はこれを準備の承認以上のものではないと理解したが、チャーチルと陸軍作戦部長のコールウェル将軍は実行命令と解釈した。チャーチル、コールウェルと外務大臣のグレイ卿は、大規模な陸軍兵力は含まれないものと理解していた²²。しかし、陸上部隊なしで海軍がガリポリ半島を「奪取」して後方連絡線を確保する、あるいはコンスタンティノープルを占領する（トルコ軍が降伏した時点でこれが必要になるのは疑いなかった）ことを期待するのは明らかに非現実的であった。ダーダネルス委員会は次のように指摘する。

陸海軍の軍人であれ文民であれ、それなりに大規模な陸軍部隊の支援なしでコンスタンティノープルを攻略できると一瞬でも考えることができたとは、とても想像しがたい²³。

だが、軍事委員会はまさにそう考えたのである。おそらくは、「陽動作戦」なら非現実的とみなされれば撤回すればよいとの認識がまだあったのであろう。2 週間後の 1 月 28 日、海軍本部は、陸上部隊なしで作戦を進めよとの明確な指示を受けている。フィッシャーは辞任寸前までいったものの、キッチナーから任に留まるよう説得された²⁴。ところが、命令

²¹ Dardanelles Commission p. 46.

²² Dardanelles Commission pp. 47-48.

²³ Dardanelles Commission p. 48.

²⁴ Dardanelles Commission pp. 57-59.

が下されるや、陸上部隊の必要性が次第に明らかになってきた。2月16日の軍事委員会では、委員会は依然として大規模な陸軍の支援部隊なしでの海軍作戦をあくまで主張してはいたが、参加する部隊の候補としてイギリス海軍師団、ANZAC軍団、第29歩兵師団が挙げられた。しかしその4日後、ダーダネルス海峡での海軍作戦がすでに始まっていたにもかかわらず、キッチナーは西部戦線での圧力を理由に第29師団の派遣を取り消した²⁵。しかしながら、当時エジプトにいたANZAC軍団を指揮するバードウッド将軍と、イギリスのエジプト駐屯部隊を指揮するマックスウェル将軍には待機を命じた。その上でバードウッドに、ダーダネルス海峡にいるカーデン提督を訪ね、陸軍部隊の必要条件を検討するよう指示した。3月5日にバードウッドから、半島を掌握するのに陸上部隊が必要なことは疑いなく、現行案の兵力（おそらく第29師団を除く）では不十分であろうと報告された。この変更が意味するところからすれば、「陽動作戦」は大規模な行動に姿を変え始めていた。3月10日、キッチナーは第29師団の派遣取り消しを撤回した。ダーダネルス委員会は次のように報告している。

2月16日の決定は、同月20日にいったん実施が保留されたが、3月10日に再び有効となった。その間に貴重な3週間が失われた²⁶。

この3週間の間に、トルコ軍には防衛を強化する時間ができた一方で、連合国の諸部隊は多大な労力を要する統連合作戦の準備期間を奪われることになったのである。

陸軍省の陸軍参謀本部は3月11日になるまで、大規模な軍事作戦が検討されている事実すら知らされていなかった。翌12日ようやく、陸軍最高司令官のイアン・ハミルトン将軍が陸上部隊の指揮官に任命された。しかし、その立場は単一軍種の指揮官でしかなく、来る作戦の全期間を通じて、あらゆる重要な支援を頼ることになる艦隊に対しては何の権限もなかった。ハミルトンが陸軍省でキッチナーから受けた概況説明は、全く不十分としか言えなかった。そもそも任務が何もない。なぜならば、この時点ではまだハミルトンの部隊がダーダネルス海峡なりコンスタンティノープルなり、あるいはその両方で、海軍の支援として厳密に何をするのかについて明確に合意された案がなかったからである。ガリポリ半島への本格的な上陸は、このときもまだ見込みが薄いとみなされていた。以前15万人規模の部隊が必要と言ったキッチナーが割り振った兵力は7万5千人にすぎなかった。その頃には、トルコ軍はすでにそれと同等の兵力を半島の防備に就かせていたが、キッチナー

²⁵ Dardanelles Commission pp. 64-65.

²⁶ Dardanelles Commission pp. 63-66.

にその情報は入っていなかった。またハミルトンには参謀を選ぶ機会も与えられなかった。それどころか、3月17日に少数の作戦参謀を伴ってダーダネルス海峡に到着した時点では、行政参謀は陸軍省から任命すらされていなかった²⁷。

3月19日から5月14日までの間は軍事委員会の会合が開かれなかったため、本格的な上陸作戦を実行するとの決定が正確にいつなされたかを知ることはできない。しかし、ハミルトンとカーデン提督の後任として東地中海戦隊を指揮していたデロベック中将は、最後の海軍単独での試みが挫折した翌日の3月19日には本格的な上陸を確信していた。「陽動作戦」から撤退の許されない本格的進攻への転換は、最高レベルでの慎重な検討を経ずになされたようである。コールウェル將軍はダーダネルス委員会で「我々はいつの間にか大規模な軍事行動へと動いていた」と証言している²⁸。

戦争指揮の最高レベルで起きたこのような迷走について、ダーダネルス委員会は次のように指摘する。

すべての証言を読み、我々に提出されたおびただしい量の文書を調べると、その曖昧模糊とした様相と厳密さの欠如に驚かされずにはいられない。これが軍事委員会の一連の活動の特徴であったと思われる²⁹。

軍事委員会の怠慢がどれほどのものであったかについては、苛立ちを募らせた軍事委員会書記官長のハンキー中佐が記した3月16日付の首相宛て覚書に如実に表れている（本稿の補遺を参照）。

このような混乱状態が招いた当然の結果ながら、ようやく派遣が決まった部隊は作戦に向けた適切な準備ができていなかった。最初に配置されたイギリス海軍師団は、海軍兵や海兵隊員で構成された臨時編成の歩兵部隊であり、イギリス大艦隊には必要とされないものであった。専属の戦闘・後方支援隊はなきに等しく、また自給できる態勢でなかったうえ、支給された小銃は他の大英帝国軍の部隊のものよりも旧式で、新式用の弾薬は使えなかった。一つだけ他のイギリス師団に優っていた点は、装甲車に搭載する機関砲台を持っていたことであった。この海軍師団は1914年のアントワープ防衛で手痛い損害を受け、多数の補充兵で補強されていた。この補充兵たちはほとんど訓練も受けておらず、ましてや複雑な統合運用による水陸両用作戦の十分な訓練などできているはずもなかった。そうした事情にもかかわらず、この海軍師団の一部の部隊が海軍作戦の開始時にダーダネルス海峡

²⁷ Dardanelles Commission pp. 67-68 and 117-120; Official History pp. 88-89.

²⁸ Dardanelles Commission p. 60.

²⁹ Dardanelles Commission p. 46.

の艦隊に送られて、爆撃で無力化されたトルコ軍要塞にとどめを刺す小規模上陸部隊の役目を担うことになった。

第 29 歩兵師団は、西部戦線での計画された役割に合わせて適切に編成されたイギリス陸軍常備兵からなる部隊だが、兵士は帝国各地から集められ、部隊全体としての訓練はされていなかった。また、水陸両用作戦の経験もなかった。イギリスの陸上部隊はすべて、管理上の都合で行き当たりばつりに艦船に乗せられて海路で送られたため、敵地上陸に向けた態勢を少しでも整えるにはエジプトでいったん下船させ、戦術的に編成を組み直してから再乗船させなければならなかった³⁰。

連合国の陸上部隊で最も実戦的だったのは ANZAC 軍団である。新編成の部隊ながら、エジプトで現地の環境に慣れ、訓練も積んでおり、スエズ運河でトルコ軍の攻撃に対する戦闘も経験していた。心身ともに屈強で優秀な兵士が揃い、指揮官のバードウッド将軍はこの作戦に参加した連合国の陸軍上級将校の中では最も有能であったが、他の部隊と同様に水陸両用作戦の訓練は受けていなかった。

大英帝国軍の陸上部隊全体にわたって、火砲、通信連絡、工兵、兵站および医療施設が極めて不足しており、塹壕戦の装備はなかった。作戦開始時には、ハミルトン将軍のいる司令部に通信隊もいなかった³¹。

フランス第 1 師団は、イギリス第 29 師団と同様に常備兵で構成されていたが、特にこの作戦のために新たに編成された部隊であった。そのため、イギリスの部隊が悩まされた問題の多くはフランス師団も抱えていたが、火砲の装備はフランスの方が優れており、世に聞こえたフランス製 75 ミリ野砲の装備一式を備えていた。

海軍の側では、参加した戦艦の大部分は旧式であり、特に機雷や魚雷には弱かった。唯一の例外は、連合軍艦隊の旗艦となった戦艦「クイーン・エリザベス」である。完成間もないイギリス海軍最新の戦艦で、当時の軍艦としては世界最強であった。ただし、まだ射撃管制システムの較正ができておらず、計画されていたジブラルタルでの標的砲撃の代わりに、トルコ軍を相手に調整砲撃を行わざるを得なかった。作戦に不可欠な掃海艇は民間人が乗るトロール漁船と大差がなく、ダーダネルス海峡の強い海流に逆らいながら進むのがやっとであった。英仏両海軍にとって、連合軍艦隊作戦は 1827 年のナヴァリノの海戦以来、水陸両用作戦は 1850 年代のクリミア戦争以来、経験がなかった。適切な上陸用舟艇はイギリス軍が持っていたにもかかわらず、フィッシャー第一海軍卿が欧州北岸の上陸作戦に備えてとっておくことにしたため、1 艘も配備されなかった。そこで急場しのぎの手段として、

³⁰ Official History pp. 116-117.

³¹ Official History pp. 119-120.

商船だった蒸気船「リバー・クライド」を転用し、この船を海岸に着けて部隊を上陸させることにしたのである。そうでなければ、兵士とその装備や補給品を手漕ぎ船とはしけで揚陸することになり、東地中海の諸港で使える船を捜し回るしかなかった。水上機数機と旧式の戦闘機は配備されていたものの、効果的な作戦に対応できる代物ではなかった³²。このように、1915年のガリポリでのイギリスの水陸両用作戦の手法は多くの点で、1759年にウルフ将軍の率いる部隊がケベックに上陸した時代とほとんど変わらなかったのである。

この兵力をまとめ、複雑な水陸両用作戦に備えて準備させるための時間は、哀れなほど少なかった。適切な陸上部隊の必要性についてようやく意見が一致したのは3月10日のことで、その時点でもまだ、陸上部隊の正確な役割は明確になっていなかった。指揮官は任命されておらず、部隊の半数はまだイギリスにいた。大規模な統連合作戦による上陸作戦が決行されたのは、そのわずか6週間後である。高級指揮官らは直前まで別々の場所にいた。当初の海軍を指揮していた東地中海戦隊司令官のカーデン中将は、海軍による突破の最後の試みとなった3月18日の前日に病気のため退任を余儀なくされ、副司令官だったデロベック少将が後を継いだ。一方、陸上部隊司令官を指揮するハミルトン将軍は3月12日によく任命され、ダーダネルス海峡に到着したのは17日になってからであった。作戦戦域に到着したハミルトンは賢明にも、参謀長と主だった作戦参謀を自身とともに戦艦「クイーン・エリザベス」に乗艦させ、デロベック提督の近くに置くことにした。両軍幹部らは明らかにうまく協力できたと見える。全軍を統括する統合司令官が任命されていなかったことを考えれば、これは幸運なことであった。しかし、ハミルトンの指揮下には行政・兵站・医療担当の参謀が誰もいなかった。これらの参謀は4月7日まで、エジプトにも到着していなかったのである³³。加えて、連合軍艦隊の旗艦である「クイーン・エリザベス」も戦闘に直接関与していたため、陸上部隊の参謀の数はかなり限られていたにもかかわらず、執務用のスペースが不十分であった。当然ながら、統合司令部も置かれていなかった。

ハミルトンの作戦参謀と行政参謀が離れていたことから生じる問題は、適切な前線基地がないことによってさらに悪化した。イギリスはダーダネルス海峡入口から約40マイル（約64キロメートル）ほど離れたギリシャのレムノス島の使用权を獲得していたが、ムドロス港に広い安全な停泊地があるとはいえ、他に部隊の助けになるものは何一つこの島にはなかった。ここに十分な施設が建設されない限り、陸上部隊に上陸に向けた準備をさせるには、海路約50時間もかかるアレクサンドリアに送るほかはなかった³⁴。配下の指揮官とともに計画を完成させるため、また部隊の再乗艦を監督するため、ハミルトンは3月24日に少数の

³² Official History footnote p. 87.

³³ Dardanelles Commission p. 129.

³⁴ Dardanelles Commission p. 130.

作戦参謀とともにアレクサンドリアに移動した。この移動は軍事的な目的として必要なことであったが、準備の最終段階という重要な時期にハミルトンが海軍の司令部から離れてしまうことになった。陸上部隊の行政参謀と兵站参謀は4月7日にアレクサンドリアに到着するが、その翌日、ハミルトンはムドロスにいるデロベックと再び合流するため、彼らをエジプトに残したまま出港した。その結果、ムドロスで輸送船団が残りの艦隊と合流した4月10日に土壇場で上陸計画に重要な変更が加えられることになり、行政参謀と兵站参謀の合流は4月18日になった³⁵。合流してからも、彼らにはほとんど出番がなかった。それまで行政的な計画立案まで担っていた作戦参謀らは、その仕事を引き渡す必要があるとは思わなかったのだ³⁶。しかしいずれにせよその頃には、ハミルトンはデロベックとともに旗艦で再会したものの、参謀の大部分は定期船「アルカディア」に移っており、海軍の参謀とは事実上連絡を断たれ分離した状態だった。

アレクサンドリアでは、情報の保全はないも同然であった。部隊の到着や活動は住民に丸見えであったし、滞在目的を知られないようにする対策はほぼ行われていなかった。ロンドンからの郵便物ですら一般の郵便制度経由で、「コンスタンティノープル野戦軍」の宛先で届いた³⁷。海軍が東地中海各地の港で部隊と装備を上陸させるのに適した船舶を調達していたことは、来る作戦の性質を宣伝したようなものだった。加えて、最初の数回の海軍攻撃の際、艦砲射撃で損傷を受けたトルコ軍要塞を完全に破壊するため、日中に小規模な上陸が何度も行われた。そのため、奇襲の要素は一切失われていた。防御側のトルコ軍は、相対する敵の部隊のことだけでなく、上陸にはどの海岸が使われそうか、そこを使わせないためにはどうするか、反撃にどう備えるかもすべて把握していたのだ。しかも3月18日から4月25日までは、連合国側の攻撃に全く妨げられずに防衛の強化に当たることができた。彼らはその期間を一瞬たりとも無駄にしなかったのだ。これに対して連合国側は、トルコ軍の兵力や配置、作戦計画に関してごくわずかな情報しか持っていなかった。偵察能力は限られ、駆逐艦での数回の沿岸航行と、カメラなしでの非常に危険な上空飛行が稀にできる程度であった。わかっていたのは、トルコ軍がヘレス岬を見下ろす高台にある堅固な陣地から上陸に使える海岸をすべて監視していることと、その海岸が鉄条網で防御されていることだけであった。しかし、そのような防御態勢も艦砲射撃で破壊できるという過信があったのだ。

いずれにせよ、ハミルトンの戦術的な上陸計画は、いろいろな意味でかなり創意に富んでいた。ANZACの側面包囲作戦で、ヘレス岬での主要努力を敵の反撃から遠ざけようと

³⁵ Official History p. 128.

³⁶ Rhodes-James Gallipoli p. 87.

³⁷ Official History p. 110.

いうのである。配下の指揮官らはこの作戦に信用を置かず³⁸、上陸部隊の分散に反対した。しかしハミルトンは、連合国の海軍の機動力を用い、各上陸点を隔てる海を制圧することで、複数の上陸点を連結できると正しく判断していた³⁹。これは連合作戦としては的確な考え方であった。一見すると、主要努力には一師団しか投入せず、軍団をそっくり包囲作戦に回すというハミルトンの計画は奇妙に思えるかもしれない。しかし、ヘレス岬の海岸は一度に1個師団が上陸する余裕しかない——しかも、それが限界ぎりぎりであった⁴⁰。フランス軍師団とイギリス海軍師団がヘレス岬に再展開し、かつ増援されれば、数的には最強の部隊が整うはずであった。しかしながら、ハミルトンが第29師団に対して上陸初日に期待した任務については、上陸地点が不適切だったことと、師団が利用できる水陸両用船の質を考えれば、はなはだ楽観的すぎた。ふたを開けてみれば、第29師団本体は見事に敵の術中にはまってしまった。上陸した2カ所の狭い海岸は敵の監視下にあり、鉄条網と塹壕で防御を固めてあったのだ。結果は壊滅同然であった。多くの死傷者を出し、初日には1カ所の海岸を何とか確保できたにすぎない。ヘレス岬周辺のいくつかの海岸を使えるようになってからも、戦力が限られ敵の攻撃にさらされている状態では、全作戦期間を通じて前線での活動は制約を受けることになった。海岸をくまなく偵察し、兵站参謀をもっと早くから関与させていれば、ハミルトンもこうした問題に事前に気づいていたかもしれない。

第29師団を指揮するハンター＝ウェストン将軍もハミルトンと同様に、同師団の上陸を担当する海軍のウェミス少将とともに装甲巡洋艦「ユーライアラス」に乗艦するという賢い選択をしていた。また、ヘレス岬先端の2カ所の狭い海岸で主上陸を進める間に、岬のトルコ軍要塞の背後に側面包囲部隊を送った。橋頭堡を確保し、ヘレス岬から前進してくる師団本体の到着を待つよう命令を受けていた二手の側面包囲部隊は、ともに上陸に成功した。しかし、師団が岬の海岸で深刻な困難に陥ったとき、ハンター＝ウェストン将軍は側面包囲部隊に後方からトルコ軍要塞を攻撃して本体を支援するよう命令しなかった。そのため、側面包囲部隊は何一つ貢献しなかったばかりか、混乱の中で包囲部隊の1つが許可なく撤退してしまった。ハンター＝ウェストンは手持ちの通信手段が不十分だったにせよ、乗艦の無線を使って命令を伝えることはできたはずである。しかしながら、主上陸部隊のあまりの窮状に愕然となり、彼らを救うための選択肢に考えが及ばなかったのは明らかであった。ハミルトンはといえば、状況を認識してはいたものの、これはハンター＝ウェストンが指揮する戦闘だと考えて介入しようとはせず、結果的に惨劇が続くのを許してしまった。

一方、ガバテペ岬では、海軍の夜間の航法誤差が原因で、ANZAC軍団の上陸部隊が

³⁸ Rhodes-James Gallipoli pp. 81-82.

³⁹ Naval Operations p. 309.

⁴⁰ Official History p. 119.

予定地点より約 1 マイル (約 1.6 キロメートル) 北に上陸するという致命的なミスが起きていた。当時の航法技術を考えれば、この程度の誤差は無理もないが、しかし綿密な偵察を行い、隠密の先行部隊に攻撃用舟艇を先導させていれば回避できたはずであった。

上陸地点の設定および船陸間移動の準備が不適切だった上に、ハミルトンの作戦参謀と行政参謀の連絡が取れていなかったことがどんな結果を招くかは、程なく明らかになった。マルマラ海で潜水艦作戦を行っていたにもかかわらず、連合国の兵站構築・強化のペースはトルコ軍のそれを上回れなかった。そのため、地上戦が膠着状態に陥ると、連合国は敵を圧倒できるだけの十分な戦力を集めることができなかった。特に医療施設は最初から全く不十分で、その結果多数の負傷兵が治療を受けられなかったり、不適切かつ非衛生的な輸送手段で後方の病院に送られる途中で無用に命を落としたりした。連合国は上陸地点に野戦病院用のスペースを十分に確保していなかった。その後、付近の島に野戦病院が設置され、適切な病院船による輸送が行われるようになってから、ようやく状況は改善した。

イギリス軍の砲撃支援は、全作戦期間を通じて不十分なままであった。原因は 1915 年にはイギリス軍全体で砲と弾薬が不足していたことだけでなく、艦砲射撃で十分に代替できるという誤った思い込みにもあった。しかし、艦隊に装備されているのは主に高速徹甲弾で、しかも適切な艦陸間の連絡を欠いている状況では、艦隊が陸上の塹壕戦を支援できる能力は極めて限られていた。すり鉢状になったヘレス岬の内陸低地は、海上の砲撃観測員から見えないことを考えればなおさらである⁴¹。特筆すべき例外は、4月25日にロイヤル・フュージリアーズ連隊のヘレス岬上陸を支援した戦艦「インプラカブル」である。

8月に決行されたスブラ湾での上陸もまた、トルコ軍要塞を側面迂回しようという創意ある試みであったが、不適切な部隊選択、指揮系統の脆弱さ、情報不足、積極性の欠如によって目的は達成されなかった。その頃には、ダーダネルス海峡の海軍に専用の上陸用舟艇が装備されていた。上陸地点の海岸は4月に使われた場所よりはるかに適切で、防御は比較的薄く、上陸後の作戦実施に十分な装備等を収容できる面積があった。ここでも、上陸した部隊が迅速に前進し、約 5 マイル (約 8 キロメートル) ほど内陸の制高点を、戦力を整えたトルコ軍に先んじて掌握することが何より重要だった。十分に訓練され、統率が秀でた部隊ならば成功していたかもしれないが、この任務を与えられた第 9 軍団は、キッチナーが募集した「新軍」のろくに訓練を受けていない新兵で構成されていた。指揮官のストップフォード中将は年配で、この任務に求められる積極性に欠けていた。ハミルトンからストップフォードへの命令は不明確で、初日には橋頭堡の隣接区域を確保すればよく、そこを見下ろす高台までは必要ないとの意味にもとれたため、ストップフォードは楽なほうの解釈を

⁴¹ Dardanelles Commission pp. 122 and 141.

した。綿密な偵察も先行部隊の先導もなかったため、上陸用舟艇は見落とされていた浅瀬に乗り上げ、暗闇の中で部隊は間違った地点に上陸した。その後の混乱が収まり、前進を始めた頃には、重要な高台を掌握する機会は失われており、すでにトルコ軍がそこに陣を固めていた。敵軍の防御を側面迂回する試みはまたしても失敗し、戦闘は再び塹壕戦の膠着状態に戻ってしまった。

1915年12月7日、長い議論の末、ついにガリポリ半島撤退の決定が下された。その頃にはすでにハミルトン将軍は罷免され、ANZAC軍団の指揮官だったバードウッド将軍が半島の全陸上部隊を率いていた。その時点で連合軍は少なくとも兵員13万人、火砲390門、軍用動物1万4千頭を揚陸させていた。先行して徐々に戦力を引き揚げた後、12月20日にスブラ湾とアンザック入江の橋頭堡が放棄された。ヘレス岬の橋頭堡はしばらく維持された後、1916年1月9日に放棄された。

軍事関係者の間では、撤退は戦争において最も困難で危険な作戦だという見方が広く受け入れられている。最後には敵の眼前で再乗艦することが避けられないとなれば、とりわけ危険が増す。バードウッドは、連合軍は撤退の間にさらに50%の兵力を失う可能性があると予測し、この計画で容認されている生命と労力の浪費を憂え、それが招く結果を怖れていた。このときもまた、バードウッドとデロベックには作戦を立案する時間がごくわずかしかかえられず、しかもここでは情報の保全が至上命題だった。計画の内容は、上級司令官とその側近の参謀将校にしか知らせないことした。

それでも作戦立案は陸海共同で、細部まで綿密に行われた。様々な欺騙・隠蔽行動の裏で陸上部隊は徐々に数を減らし、12月19日の時点ではスブラ湾とアンザック入江の橋頭堡にそれぞれ1万人を残すのみになっていた。隠蔽行動には、夜間に撤収させた兵員を昼間、再上陸させ、昼間に揚陸しておいた空の輸送箱を一杯にして夜間に運び出し、最終的な撤退を隠すため砲兵隊の撤収に合わせて徐々に同じ射撃パターンで艦砲射撃に置き換え、最後に撤収する部隊が小銃の自動発射装置を作って残し、艦船の探照灯でトルコ軍の夜間監視の目をくらすとといった策が用いられた。100隻を超える輸送船と50隻の病院船が派遣され、トルコ軍の監視の目を避けるため、昼間は船が岸から見えないように慎重に移動時間が決められた。12月19日から20日にかけての夜、スブラ湾とアンザック入江の橋頭堡からの撤退が、負傷者1人を出しただけで完了した。その後、翌年1月9日までの約1カ月間にヘレス岬でも同じ作戦を実施し、そのときは負傷者も出さずに撤退に成功した。史上最も成功した水陸両用作戦の1つに数えられるこの撤退作戦は、卓越した統合参謀業務、適切な部隊投入、厳格な情報の保全、巧妙な欺騙工作、天候上の幸運の産物であった。トルコ軍は、何が起きているのかに最後まで気づいていなかったようだ。ただし、実は侵略してきた連合軍が立ち去るのを喜んでいて、あえて妨害しなかったのだとの見方

もある。ごく一部の現場レベルでは、それが事実だった所もあったかもしれない。しかし、ガリポリ防衛に当たるトルコ第 5 軍のドイツ人司令官リーマン・フォン・ザンダース将軍は、戦闘態勢のまま半島を離れた連合軍兵士は皆、おそらくドイツ軍と戦うために西部戦線に向かうはずだと知っていた。その将軍が戦わずして敵兵の脱出を許したと考えるのは非現実的である。

この嘆かわしい一連の作戦行動についての結論は、公式戦史の次の一節に実に的確に表現されている。

最初の部隊集結時に犯した過ちを作戦行動中に修復するのはほぼ不可能だという周知の原則が、これほど明確に示された例はまれである。人間活動のあらゆる領域において、とりわけ戦争においては、成功の基盤は周到な準備にあるといえよう。たとえ小規模な計画でも、この教訓を軽んじることは極めて重大な失敗の原因となる。ましてや、海から敵地へ上陸するというあらゆる軍事作戦の中で最も困難な作戦に、計画の細部に至るまで慎重に検討しないまま着手すれば、完全な失敗を招くことになり、それが当然の報いなのである。⁴²

作戦立案の段階で、ロンドンの軍事委員会、海軍本部、そして陸軍省での検討と手続きがこれほど混乱し、規律なく行われていたのでは、ハミルトン将軍と配下の部隊に成功の見込みは微塵もなかったのである。

⁴² Official History p. 108.



参考文献

Aspinall-Oglander C. F. *History of the Great War – Military Operations – Gallipoli* (London, 1929).

Coates T. *The World War I Collection – Gallipoli and the Early Battles – The Dardanelles Commission* (London, The Stationery Office, 2001).

Corbett J. S. *History of the Great War – Naval Operations Volume II* (London, Longmans, 1921).

Rhodes-James R. *Gallipoli* (London, Batsford, 1965).

Rudenno V. *Gallipoli – Attack from the Sea* (New Haven and London, Yale, 2008).

Wemyss W. *The Navy in the Dardanelles Campaign* (London, Hodder and Stoughton, undated).

補遺：軍事委員会書記官長モーリス・ハンキー中佐の首相宛て覚書 (1915年3月16日付)

1. 軍事委員会の立場から見れば、ダーダネルス海峡攻撃に関する状況は全く不透明である。前回の会合でも、海軍大臣より、海軍は依然として陸軍部隊の支援なしでダーダネルス海峡を突破することを希望し、期待しているとの報告があったばかりである。しかし今や現地を知る海軍将校の大部分が予想したとおり、艦隊は機雷と曲射砲に行く手を阻まれている。この障害を突破するため、相当数の陸上部隊の投入が検討されている。
2. これまでのところ陸軍部隊の投入が提案されたのは、ダーダネルス海峡を強行突破した後に状況を整える目的に限られていたことを念頭に置かねばならない。したがって、軍事委員会に関する限り、我々は陸上部隊に極めて困難な作戦を実行させることになる。
3. 軍事委員会が検討中の作戦の範囲と、その作戦の実施に向けてなされる準備の程度を明確にすることが望ましいのではないか。これに関しては、連合作戦は他のいかなる種類の軍事行動よりも慎重な準備が必要であることを忘れてはならない。我が国の歴史を通じて、この種の攻撃は準備が不十分であった際には失敗しており、成功した事例はほぼすべて、事前に極めて慎重な準備が行われた結果である。今回の場合、こうした準備が遺漏

なく検討されたと確信することが軍事委員会の本分であると思われる。

4. また、この種の作戦から得られる最大の利点の一つ、すなわち奇襲の要素がすでに失われているという点も忘れてはならない。最初の時点で大規模な部隊を秘密裏に目立たないように派遣し、かつ舟艇ほか必要な装備を、外郭要塞が陥落した時点で使えるように万全に整えていれば、賢明な陽動により敵を混乱させつつ、要塞を見下ろす高台を一撃奇襲により掌握することは決して不可能ではなかったはずである。しかし実際は、外郭要塞への初回の爆撃さえも、軍事委員会で意図していたような単なる陽動作戦としてではなく攻撃として発表され、何としてでもダーダネルス海峡を強行突破するという我が方の意図を隠蔽する試みは一切なかった。艦隊が機雷原で足止めされている今となつては、敵は我が方の攻撃がどの地点を目標としているかを正確に把握している。敵軍には、この地点の防備を固め、砲を据え付け、海峡兩岸の地上に援軍を投入し、ありとあらゆる準備を行うのに必要なだけの時間があつた。したがって、本軍事行動は極めて困難な性質のものとなろう。軍事委員会は、特に以下のような点に関する準備の程度について、陸海軍両当局を厳しく追及すべきと考える。

- a. 提案された投入部隊数
- b. 船舶・舟艇配備のための手配
- c. 上陸用栈橋、舟橋などの準備
- d. 水・糧食補給の手配
- e. 医療施設の手配。洋上病院しか利用しないのか、あるいは陸上に野戦病院を設置する予定か。
- f. ダーダネルス作戦は一撃奇襲によって実施されるのか、あるいは包囲作戦の可能性は検討されているか。
- g. 後者の場合、攻城砲は使用できるか。その揚陸と弾薬についてはどのような手配がなされているか。
- h. 可能性として、敵の可動式重砲に対抗するのに必要な重砲を軍艦が提供する案がある。その場合、陸軍当局は、軍艦において使用できる砲弾がこの目的に適し、敵の曲射砲があるとみられる低地を縦射できると納得しているか。
- i. 本作戦に必要と思われる非常に大量の弾薬を補給するためにどのような手配がなされているか。
- j. 上陸点から地上部隊に、道路が極めて少ない起伏の多い土地を經由して弾薬、糧食、水などを輸送するためにどのような手配が計画されているか。存在する道路は、おそらく敵軍により撤退前に破壊されていることも念頭に置かねばならない。

5. 上陸の実施前に以上のような細部（おそらく他にもあると考えられる）が十分に検討されない限り、深刻な惨事が生じうると考えられる。